

地元畜産のご紹介



海部地区では、古くから酪農・畜産（養牛、養豚、養鶏など）が盛んに行われています。豊かな地域農業の未来を次世代に繋げるため、故郷が育んだ地元産の畜産物の地産地消にぜひご協力をお願いいたします。

管内畜産の現状



海部地区では12軒（酪農4軒、和牛2軒、養豚4軒、養鶏2軒）の農家が酪農・畜産を営んでいます。近年はコロナ禍による業務用需要の低迷に加え、世界的な飼料需要の増大や海上運賃の上昇により輸入飼料価格が高騰しており、厳しい経営環境が続いています。

地元産の畜産物



搾乳された生乳は協同乳業に出荷され、牛乳や乳製品として消費者に届きます。牛肉は和牛として全国各地へ、豚肉は“愛西ポーク”などとして愛菜耕房をはじめ、量販店で販売されています。鶏卵も当JA産直施設のほか、地元の量販店に並んでいます。

堆肥の販売



畜産農家は、経営の安定化と環境に配慮した持続可能な地域農業の発展に貢献するため、地元農家や家庭菜園を楽しむ地域の方々などに向けて、自家製の堆肥（牛ふん・豚ふん・鶏ふん）を販売しています。詳しくは各農家まで直接お問い合わせください。



酪農家 かとう ゆうた 加藤 悠太さん(33歳)

今年で就農して13年目を迎える加藤さん。現在はご両親とともに130頭の乳牛を大切に育てています。

酪農のこだわりについて加藤さんは「愛情を注ぐことに尽きます。牛たちは家族ですから」と笑顔で話します。

加藤さんの牧場では、牛たちを想い、快適な環境を整備するために牛舎内に大型の扇風機を配備しているほか、設定温度以上になるとミストが噴射される仕様となっています。また、牛たちがゆっくり休めるようにと敷料しりょうを使用しています。さらに、虫や鳥よけネットを施し、病気やストレスからも牛たちを守っています。

加藤牧場では地元のオペレーターに牛ふん堆肥を提供し、飼料用トウモロコシを生産してもらって耕畜連携を進めており、昨年の1月から新たに給餌を始めました。「大学で専攻していたことから、自給飼料の実現は長年の夢でした」と語る加藤さん。牧草などの飼料価格の高騰など厳しい環境が続く中でも、牛

たちの健康に丁寧な気を配りながら、より良い乳牛の管理を日々模索しています。

加藤さんは並行して堆肥の販売も積極的に行っています。「おかげ様で□□ミでお客様が広がり、現在は地域の農家さんを中心にご注文いただいています。ほぼ毎日2トンプで配送業務を行っています。牧場内の堆肥舎でも販売していますので、いつでもお気軽にご連絡ください」と話してくれました。

今後について加藤さんは「さらに乳牛を大切に育てて乳質を高め続けるとともに、自家生産の乳牛を増やしていくために繁殖技術の向上を図ることが目標です」と語り、努力を積み重ねています。

そんな加藤さんから消費者の皆さんに向けて、「日々の食卓を潤す牛乳をぜひ、もう一杯飲んでいただけたらとても嬉しいです」とメッセージをいただきました。

